

児童虐待認識の文化的影響

— 日韓の大学生における国際比較 —

岩 元 実 佳

韓国は日本と生活様式や文化が類似している一方で、家族観や教育・しつけの意識が違うことが分かっており、その違いが、虐待としつけの区別に影響を与えている可能性が考えられる。そこで本研究では、日韓の虐待認識の違いと、その違いに影響を及ぼす文化的要因について検討した。韓国は褒められた経験は多いが、体罰をしつけとして許容していることから韓国人は日本人に比べて、虐待行為をしつけと考えている可能性がある。また、家族機能の高い韓国では、家族を重要視していると考えられ、親からのしつけや教育に従順な傾向が高い可能性がある。よって、韓国人の方が日本人より児童虐待への認識が低いという仮説を立てた。目的を検討するため、児童虐待認識を測定するためのビニエツト項目と家族機能測定尺度と親から褒められた経験と叱られた経験に関する項目を用いて、日韓の大学生を対象に調査を実施した。

各項目及び因子に関して国と性別での差を検討したところ、ビニエツト項目に関して、「ネグレクト（公共場面）」では、日本では男性の方が女性よりも、韓国では女性の方が男性より児童虐待認識が有意に高かった。そして、女性において、韓国の方が日本より児童虐待認識が有意に高かった。「性的虐待（公共場面）」では、韓国の女性が日本の女性より有意に虐待認識が高かった。「身体的虐待（家庭場面）」では、日本の方が韓国より有意に高く、女性の方が男性より有意に高かった。「心理的虐待（家庭場面）」では、日本の方が韓国より児童虐待認識が高かった。「性的虐待（家庭場面）」では、日本の方が韓国より児童虐待認識が高かった。家族機能測定尺度に関して、全ての因子において、韓国の方が日本より家族機能が有意に高いことが示された。また、親からの養育体験に関する項目に関しては、褒められた経験は男性より女性の方が有意に多かったが、叱られた経験については有意な差は見られなかった。

家族機能が児童虐待認識に及ぼす影響について検討した結果、日本の男性では「凝集性」が「身体的虐待（家庭場面）」に正の影響を及ぼしていた。韓国の女性では「凝集性」が「ネグレクト（家庭場面）」に正の影響を及ぼしていた。一方で、「適応性」は「ネグレクト（家庭場面）」に負の影響を及ぼしていた。韓国の男性では「相互依存性」が「心理的虐待（公共場面）」に負の影響を及ぼしていた。一方で、「凝集性」は「心理的虐待（公共場面）」に正の影響を及ぼしていた。また、「相互依存性」が「性的虐待（公共場面）」に負の影響を及ぼしていた。

以上のことから、日韓間で親からの養育体験について有意差は見られなかったため、韓国人は日本人より虐待行為をしつけだと考えているという仮説は支持されなかった。また、韓国の方が日本より家族機能が高く、それによって虐待認識が低くなるということは一部項目において支持されたが、家族機能の高さは必ずしも虐待認識を高めるわけではないということが分かった。さらに、児童虐待認識の高さは国の文化によって左右されることが明らかとなった。